

氏名	うちやまともこ 内山智子
学位(専攻分野)	博士(人間・環境学)
学位記番号	人博第367号
学位授与の日付	平成19年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科人間・環境学専攻
学位論文題目	ベルクソンにおける選択と自由

論文調査委員 (主査) 教授 小川 侃 教授 富田 恭彦 助教授 佐藤 義之

論文内容の要旨

この博士学位申請論文は、日常生活の中で人間はいかにして様々な選択肢を描き出し、そのうちの一つを選んでいるのか、また、「よい」行動とは何であり、自由に生きるとはどのようなことを意味するのか、という問いに対して、19-20世紀のフランスの代表的な哲学者、アンリ・ベルクソンの議論をもとに、一つの答えを提示することを目的とするものである。

ベルクソンは、事実間の恒常的な法則性の解明を目標とする実証主義の影響下にあった当時のフランスで、意識に対する決定論的な法則の適用に強く反対し、生物の行動はそれ自身の自由な選択に任せられていると主張した。ベルクソンの理論は、哲学史上はむしろ少数派といえる「自由裁量 (libre arbitre)」の立場に立つ理論であり、同時に大脳生理学や相対性理論等の現代に通じる科学的知識をふまえて、精神主義的な立場から論陣を張った、数少ない哲学理論の一つである。その意味でベルクソンの理論は、現代に生きる我々が自由な選択の観点から、自分の精神と現実の世界との関係を考える上で、非常に有力な理論であるということが出来る。

申請者はまず、『意識に直接与えられたものについての試論』(1889)(以下『試論』と省略する)における「自由」とは、行為が外的な強制によらずただ各々の自我のみから発することであり、各々の「人格 (personnalité)」や「自我 (moi)」を完全に表現するような行為が自由な行為と呼ばれること、そして、過去の経験が融合してこの人格を形成するが、人格の中には全体と融合しない局所的な傾向があり、自由の程度はその行為をもたらした部分的な傾向が人格全体とどの程度合致するか依存することを明らかにする。

次に、『物質と記憶』(1896)では、生物の持つ知覚が選択のための可能な選択肢の予描にほかならないとされること、つまり、知覚にはすでに過去の記憶が投影されており、これは過去の経験を参照してその対象への可能な関わり方を予測するものにほかならないことが明確にされる。

その上で、申請者はこの「過去の記憶が可能な行動の選択肢を描き出す」というテーゼによって、『試論』の、「過去の記憶の全体である人格が、各々を個性的な行動に向かわせる」というテーゼが、具体的な行動の場面で基礎付けられることを明らかにする。しかしそのようにして記憶という概念を媒介に人格と行動の選択肢を結びつけただけでは、「人格に基づいて行為する自由」はある程度保証されるにしても、「いかにしてより自由な行為を選択するのか」という問題は不明瞭なままであり、この点がこれまでベルクソン哲学の研究上も問題となっていた。

この問題に対し、申請者は、知覚に投影される記憶の想起が、外的状況のみならず、自発的な「努力 (effort)」によって左右されるという『物質と記憶』のテーゼに注目し、この記憶を想起する「努力」という概念を媒介に、二つの自由論を結びつけ、次のような関係を新たに導出する。すなわち、記憶の総体が人格を形成し、人格に基づく行為ほど自由であるとする『試論』のテーゼに、想起する努力が強まるほど、より多くの記憶が反映されるという『物質と記憶』のテーゼを結びつけ、想起する努力が強まるほど自由な行動が可能になる、という関係を導くのである。

この、新たに導出した記憶と行動の関係を基にして、申請者は、さらに、この努力の度合いを左右するものは何か、とい

う問題を立てる。というのは、記憶を想起する努力が「意志的な (volontaire)」と言われることから、努力は意志「(volonté)」によって生じると考えられるが、記憶の想起を左右するこの意志は、先に論じられた、記憶の全体が形成する傾向という意味での、人格としての意志とは異なるからである。

学位申請論文の第二章では、この問題に対し、努力の感覚についての分析から、努力をもたらす原因として、記憶が形成する人格としての「意志 (volonté)」とは区別される、そのつど創発的に生じる「意欲 (le vouloir)」の存在が帰結される。

次に、第三章では、人格を形成するとされる、過去の記憶の在り方が分析される。過去の記憶は、その全てが単一の人格を形成しているという意味では、互いに融合した不可分な単一体として残存していると考えられるが、他方、想起においてぼんやりとした記憶のかたまりが諸々の記憶に展開され、ある特定の時と場所における思い出が再現されるという意味では、個々の記憶は互いに区別を保ったまま保存されていなければならないためである。申請者は、意識の「表層」や「深層」といった表現に注目し、意識の多層構造という観点からこれらの記憶の並存を明らかにした。

第四章と第五章では、自由や選択の問題がほかの観点から、特にベルクソンの理論が含む問題点を取り上げる形で論じられる。まず第四章では、「過去の実在性」というテーゼに関してベルクソンの理論が含むと思われる問題点と、その解決策が明らかにされる。

ベルクソンは未来を含む時間を直線的に表すことには強く反対したが、過去を一連の規定された系列として考えることには寛容であり、むしろ自ら過去を直線的図式で表している箇所も少なくない。けれども、そのように一連の過去の決定性と実在性を主張することは、過去における選択の自由を否定することにはならないのかという疑問に対して申請者は『創造的進化』(1907)で提唱される、進化の系統樹と個人の人生のアナロジーを用いて、複数の世界の並存という観点から、一つの解答を示した。

さらに、第五章では、「未来」や「可能なもの」という概念についてベルクソンの理論が含むように見える矛盾が取り上げられる。ベルクソンは自由な選択や創造を支持する立場から「未来」や「可能なもの」の存在を否定したが、他方で、知覚作用は、潜在的なものの一部を選択的に現勢化するはたらきとして定義されており、このような定義は、未だ知覚されていない潜在的なものの存在を要請しているといえる。申請者はこの章で、ベルクソンの知覚理論が、未だ知覚されていない潜在的な物質の存在を含意していることを論証した上で、潜在的なものの一部を現勢化する知覚作用が「選択」にほかならないことや、未だ知覚されていない物質の存在こそが、予想に反したものの現実化をもたらすことを根拠に、そうした物質の存在は、「選択」や行動の「新しさ」を阻害せず、むしろそれを成立させる条件であることを導いた。

最後に、第六章では、よりよい自由な行動とは何か、またいかにしてそうした行動を選択できるのか、という論文全体の問いに対し、第一の主著である『試論』から、最晩年の著作である『道徳と宗教の二源泉』(1932)までを視野に入れて、自由な行動の諸条件が明らかにされる。合わせて、ベルクソン哲学の全体が、人格の傾向や力という観点から再構成されている。

論文審査の結果の要旨

本学位申請論文は、19世紀から20世紀のフランスのみならずヨーロッパを代表する哲学者、アンリ・ベルクソンの哲学における「選択と自由」の問題を主題化している。本論文がとる研究上の形式的な特徴は次の二点である。(1)ベルクソンの自由意志論を彼の哲学の発展の過程に位置づけながら再構成するという仕方を取っていること。(2)「意志」と「意欲」との概念の上での区別をおこない、「よりよく生きること (ト・エウ・ゼーン)」というソクラテス以来の哲学の根本の問題に迫る考察を自由意志の観点からベルクソン哲学のうちに論証したこと。以下これらの二つの点について詳しく評価する。(1)についてはこれまでのベルクソン研究にあっては、一方では人格に基づいて行為する自由を論じた『意識に直接与えられたものについての試論』(以下『試論』と省略する)では自由行為を可能にする方法についての議論が欠如していること、他方で、第二の主著『物質と記憶』では選択の自由を人格との関係において明らかにしていないという点が指摘されていた。この隘路に道を開くことを申請者は試みた。申請者の再構成の試みはベルクソンのうちに『試論』以来一貫して登場する「努力 (effort)」の概念に焦点を絞り、この概念を媒介にして『試論』と『物質と記憶』の二つの自由論の間を架橋し、統一的に解釈することに成功した。申請者はこのようにしてベルクソンの自由論を総合的に且つ一貫した仕方で再構成した。ついで

(2)については、すでに言及した二つの主著、『試論』と『物質と記憶』のみならず、『創造的進化』や『道徳と宗教の二源泉』(以下『二源泉』と省略)をも射程におさめ、人格の傾向や力という観点から人間の生活と生き方の価値を統一的に再構成することができるとしている。つまり『創造的進化』に見られる「生命のはずみ」という有名なベルクソンの形而上学の根本のテーゼが、実は、人間の道徳の最終的な基盤を形成しているということを明らかにしている。

以下ではこの二つの形式的特徴が本論文においてどのような具体的な成果に結びついたかを述べることで、ベルクソン哲学の「選択と自由」の研究における本学位申請論文の意義を明らかにする。(1)第一の点では知覚の内容が精神の想起の努力と密接に関連していることが析出された。精神が弛緩している場合には知覚は貧弱なものとなるのにたいして、精神が緊張を伴う注意力をもって生きている時には知覚は豊かになる。身体を含む状況の全体が変わることがなくとも精神の集中力によって知覚は豊穡なものになる。こういうところから申請者は想起する努力の力強さと、行動の自由の可能性の深さと広がりとの間には相関関係があるということを経験から抽出した。ここには<人格に基づく行為は意識の総体(これは、『物質と記憶』では記憶力とも言うべきもので個々の記憶や想起とは原理的に区別される)に関わり自由な行為となる>という『試論』のテーゼと、<強く想起する精神の努力は精神のより深い根底に通じる>という『物質と記憶』のテーゼとが深く結合している。このような総合をベルクソンはそれぞれの著書の中では明確に述べているわけではないが、申請者は、ベルクソンのいわば「言うべくして言い得ざりし」点を明らかにしている。(2)ついで記憶と自由な行動とのこのような関係をさらに「精神の努力」の度合いを強めるものが如何なるものかを問いつめて、「意志的なもの (le volontaire)」と、「意志 (volonté)」およびその根源の「意欲 (le vouloir)」の次元に突き当たった。この「意志的なもの」とは個々の記憶を想起する努力であるのに対して、人格としての「意志 (volonté)」はそれから区別される。これらの両者と「意欲」との関係は、申請者が解明しようとしている重要な事柄である。申請者は、テキストの解釈と再構成に基づいて努力の感覚の分析から努力をもたらすもの、努力の意志の根源に有るもの、人格の意志の根底に潜むものとしての意欲の次元を明らかにした。記憶が形成する人格の意志とは区別される意欲、新しい次元を開くという意味で創発的な意欲の次元を指摘した。最終的にはベルクソンの哲学のなかから哲学のソクラテス的な在り方と言うべき原初の姿をも射程におさめて、ベルクソン哲学から「よく生きること (ト・エウ・ゼーン)」という哲学の有るべき姿を結論としている。身体の傾向にそって生きる在り方から生命の原理に合致して生きる生存の仕方まで無数に異なる様々な次元のなかを人間存在は活動しており、つねによりよく生きること、より自由に、より幸福に生きることを目指しているということを結論付けている。

本学位申請論文は、ベルクソンの4主著、『試論』、『物質と記憶』、『創造的進化』、『二源泉』のみならず『精神のエネルギー』、『思想と動くもの』などの根本のテキストの詳細な文献研究に基づくとともに、死後出版の『ベルクソン雑録』、最近出版されている『ベルクソン講義録』のほか、諸家のベルクソン研究の二次文献の研究成果を積極的に取り入れており、今後のベルクソン研究の一方向を示唆する、可能性に富む意義深い研究であるといえる。なお、本論文を構成する各章のほとんどは、すでに学会誌等に掲載され、高い評価を得ている。

また、本学位申請論文は、人間の全体的現実を環境との関わりに沿って解明することを目指して創設された人間・環境学専攻、人間存在基礎論講座の理念にかなったものと言える。

よって本論文は博士(人間・環境学)の学位論文として価値あるものと認める。また、平成19年1月15日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行なった結果、合格と認めた。